

イモ言葉いろいろ

Peter J. Matthews (ピーター・J・マシューズ)

研究戦略センター

ぼ くは長年サトイモを調査してきた植物学者である。隣の芝生は青く見えるしてえぐいイモの研究に身を捧げてきた。サトイモについて、世界中でいろんなことが言われている。必ずしもいいことばかりではない。祖国ニージーランドのある料理研究家は、サトイモの味は壁紙を貼るのりのようにだと書いている。しかし各国の人びとは、それぞれお得意の育て方や調理の仕方を心得ているのだ。そのニージーランドの料理研究家は無知なだけだったんだらう。

サトイモを求めて三千里。ぼくは世界の各地でサトイモの調査をしてきた。サトイモにかけ



ミャンマーの渓流沿いに育つ野生のサトイモ

キプロス島では、ついにキレたぼくはこう叫ぶ。「アンタは完全にサトイモの葉だ！」。そう言いながらも「サトイモの葉に水をかけるようなものかもしれない」と考えてしまう。聞く耳をもたないものなを言っても、サトイモの葉が水をよぼはしくように、浸透しないのだ。叫び続けているのが渴いたぼくは水をがぶがぶと飲む。するとキプロスの農民は言うのだ。「サトイモみたいに水を飲むやつだな」。「そんなにサトイモが好きなら、カルバシに行きな。繁盛するよ」。確かにキプロスのカルバシは水に思まれ、サトイモがよく育つところ。だがぼくの次なる目的地はエジプトだ。カイロの旧市街の市場を歩くとき、あちこちでサトイモが売られているのを目にする。

「こんなにたくさんさんのサトイモが砂漠に育つのか! 奇跡だ!」と驚いていると、「なに言ってるんだよ」と八百屋のおばちゃん。「奇跡でもなんでもないさ。砂漠で育つわけがないじゃないか。ナイール河沿いでできるんだよ、デルタ地方からカイロの川上にかけてさ。古いことわざがあるんだよ。すべては天の恵みだが、サトイモだけは手入れと



キプロス島の台所で

る情熱を地元の人びとにわかせてもらうのはひと苦労だ。聞き取りをしようにも、たいがい無視される。

水やりがいろいろ「ね」。

ナイールには確かに水が十分ある。

キプロスも水には事欠かない。東南アジアのとび真ん中、モンスーンが山岳地帯にどつどつ雨を降らす。野生のサトイモの調査のために森に入るつもりで行くが、すでに首都ヤンゴンのいたるところに、サトイモが生えているのを目を奪われる。湿地のサトイモの茂みを探索してヒルが足に吸い付いてくとも、滝のそばに生えるサトイモを見るためにツルツルすべる岩に登ろうとも、長年してきたことなのでちつとも危ないと思ったことはない。地元同僚の、「サトイモの葉に水がつかないように、近づくと危険が去りますように!」という声なんか聞かええええええええ。

じつは、危険をおかして遠くへ出かけずともサトイモを観察できるよう、京都桂川沿いの小さな畑でサトイモを育てようとしているのだが、どうもうまくいかない。肥料や水をやりすぎたり、逆に足りなかつたりと、何をやってもうまくいかない。温暖化のせいだと八つ当たりする始末。畑の仲間たちはことごとく頭を横にふて呆れ顔で言う。

「芋頭で足をついたな(うかつなことをした)」。

「芋の煮えたもこ存じない」。

地主にいたっては、あいつと付き合うのは、「すりこぎで芋をもる(不可能なことをする)ようなんですよ」と言う。

ほつといてくれ。芋頭とよばれようが、芋頭でも頭は頭だ。ぼくの飽くなきイモ探求は続く。